

玉利喜造の靈氣説からみる自然と身体

野村 英登 (TIEPh)

キーワード：玉利喜造、佐藤信淵、靈氣

はじめに

玉利喜造(1856～1931)は、駒場農学校の第1期生として卒業(1880年)、米国留学(1885～1887年)を経て東京農林学校に着任(1887年～)、農家大学校教授として畜産学講座や園芸学講座をの担任を勤めながら(1893年～)、農学博士(第1号)を授与され(1899年)、その後盛岡高等農林学校校長(1903年～)、鹿児島高等農林学校校長(1909年～)を歴任、貴族院議員にも任じられた(1922年～)、日本の農業政策、農業教育を牽引した人物の一人と言える。ただその一方で彼は自身の健康不安から、当時流行した「精神療法」、靈術(催眠術)などを使って精神の力により病気を治す療法や健康法に傾倒していった。そして農林学校での倫理教育に取り組む中で、儒教倫理と健康法の実践を重視し、関連する著作も残している¹。この方面の玉利の思想で、中心的な理論となるのが靈氣説である。ただしこの靈氣説は、アカデミズムや学校の教官や生徒たちよりも精神療法を実践していた靈術家たちに歓迎され、また彼自身親交もあった。

玉利喜造の靈氣説に関係する著作で書籍にまとめられたものには以下のものがある。

『冷水浴の実験と学理』、実業之日本社、1907(明治40)年

『実用倫理』、弘道館、1909(明治42)年

『内観的研究：邪氣、新病理説』、実業之日本社、1912(大正元)年

『内観的人類進化説』、育英書院、1914(大正3)年

『内観的研究説一卷』、玉利喜造、1930(昭和5)年

これらの著作は、2作目以降前作の内容を一部含みながら一作ごとに議論を広げており、最後に出版された『内観的研究説』は、一卷を題していたものの翌年に玉利が亡くなったため続刊することはなかったが、玉利の靈氣説の集大成と言ってよいだろう。玉利の靈氣説は彼自身の実体験を基礎としながら、東洋と西洋の思想を組み合わせたものとなっている。その概要について、先行研究では同書にもとづいた議論がなされている²。しかし同書の記述だけを全面的に採用して、玉利の靈氣説を読み解くには、実のところ問題がある。本稿では玉利の靈氣説に関して、その成立過程を検証しながら、

¹ 玉利の生涯については、玉利喜造先生伝記編纂事業会 1974 を参照。玉利と精神療法の関係については、吉永 2004A、B に詳しい。

² 中堀誠二「靈氣邪氣の説」、玉利喜造先生伝記編纂事業会 1974 収録。

特に玉利が参照した伝統思想との関連からその思想を位置づけてみたい。

1. 靈氣と邪氣の定義

『内観的研究説』において、玉利は靈氣と邪氣の名称について、「靈氣とは靈妙の氣と云う意味にして、邪氣とは古来漢方医が唱えたる名称をそのまま採用」³しただけで深い意味はないとしている（同書 64 頁）。というのも、玉利にとって、靈氣と邪氣は何よりも自身の体験によってその存在を実感していたものだったからである。例えば靈氣については、玉利は原稿執筆時に起きた出来事を次のように記している。

余は昨秋より此の種の靈氣左手に多く上昇進入し来たりて、その二三塊は肘関節の神経の間に介在し、所謂関節^{リウマチ}癱瘓室斯を起し、時に左手は動かし兼ねるまで苦痛を感じつつ之あるが、今此の稿を筆記するに方り、胡座して左手の肘関節を曲げて大腿の内側に強く壓しつつ案じおきたるに、僅かに五六分間に至らずして大腿に靈氣の転動起りて、……当夜（大正十三年四月一日夜）此の状態にては肘関節の癱瘓室斯が太腿に移動せるものの如し。……肘にも被服二枚、太股は四枚、合して六枚重ねたる中間物あるに拘わらず、斯く靈氣の相通ずるは靈氣の性質電氣と等しきを窺い知るべきなり。（同書 87-88 頁）

玉利は後述するように、靈氣を「原始的神経の今日吾人の身体内に遺留し居るもの」（同書 122 頁）と考えていた。靈氣は、「靈妙なる有機的の氣団氣塊」で、「生物の生命に必要なもの、否実生命の本源なれば、固より寸時も欠くべからざる有機的靈妙の氣塊」なのだ（同書 67 頁）。

これに対して邪氣は、邪氣は純粹に物質的な存在として想定されている。玉利は、邪氣が炭酸ガス^{ガス}を生成成分とすると考えていた。例えば邪氣が舌から排出されるときに、ラムネのような刺激を感じたと自身の体験を述べている（同書 129 頁）。実際、機械的な検出を試みたが、それは失敗に終わったと記されている（同書 138 頁）。つまり玉利にとって邪氣とは、「体内に発生する無機^{ガス}的瓦斯及放射物にして、所謂物質的氣流」であり、「筋肉並に食物の損敗より絶えず体内に発生して排泄せらるべきもの」であった（同書 67 頁）。

靈氣も邪氣も古今東西その存在は知られていたが、東洋の書物ではこの二気の混同が多く、西洋の書物では混同されることが少ないと玉利は考えていた（同書 66 頁）。靈氣に相当するものとして玉利が挙げているものは、炁・明德・靈・魂・精靈・幽我・覺心・玄牝・夜氣・動氣・anima・Soul・Pneuma・Phantom・Geist・Ghost・Logus などであり（同書 71 頁）、特にバラモン教の「梵天」が靈氣の内容にもっとも近いとし、それぞれに典拠と解説を加えている。一方、邪氣に相当するものとしては、

³ 以下、引用文は常用漢字と現代仮名遣いに改め、適宜振り仮名を付してある。

邪氣（炁）・疲労物質・毒素・Aura（Pneuma）を挙げ、同様に典拠と解説を加えている。このように靈氣は実体のないもの、邪氣は実体のあるものという違いがあり、ただいずれも目には見えないが身体感覚で実感できるものであった。

2. 風邪から邪氣へ

『内観の研究説』では、玉利が靈氣と邪氣を発見したのは同時期であるかのように書かれている。例えば、明治40年頃に、加藤弘之（1836～1916）の唱えた利己心を中心に据えた人間観に反対して、『大学』で説かれる明德の存在を挙げ、中江藤樹を参照しつつ説明した際に、明德なるものを玉利自身が内観法を実践することによって、自身の内に靈氣として存在していることを発見したと述べている（同書10～11頁）。しかし玉利の著作によるかぎり、加藤への反論内容を収録した『実用倫理』には靈氣なる語は出てきていない。それに対して、前作の『冷水浴の実験と学理』の時点で、玉利はすでに邪氣について議論しているのである。

健康法としての冷水浴を論じた『冷水浴の実験と学理』では、冷水浴の効能として、「神経に及ぼして心理的の現象を呈するもの」、つまり精神への影響と、「生理的又は一般の健康に及ぼす現象」、つまり肉体への影響の二点を挙げている（同書19頁）。

冷水浴の精神への影響については修養的な側面があると玉利は主張する。神経が強くなれば精神気力が増進するため、困難を苦としない「堅忍不拔不撓不屈の精神を帯びたる勇氣」の持ち主になれるとしている（同書22頁）。しかしそうした精神的な修養は健康にもつながる。玉利は冷水浴によって病気に罹らなくなる理由として、「神経が強壮なれば、諸々の病も侵入し難く又は其病に打勝つことも容易である」とし、「徳川家康も病氣は臆病者が罹るのであると云はれたそうではありますが、精神気力が旺盛であれば病に罹らぬ」ものであり、「精神気力に依て健康を維持し得」と玉利は考えていた（同書24・25頁）。

冷水浴の肉体への影響については、玉利は「冷水浴を行えば皮膚が丈夫に成って風邪に冒されぬ」として、その理由を「皮膚の神経が丈夫に成るから」と理解している。しかし「皮膚が丈夫でも其下に弱き局部、又は機関があるならば、その丈夫なる皮膚を透して其弱き局部を冒」すため、身体内外各部の神経を丈夫にするものと理解すべきだとしている（同書25・26頁）。

玉利はさらに考察をすすめ、風邪の性質は症状からするとリウマチと同じもので、双方ともその正体は邪氣であると述べる。玉利の著作での邪氣説はここに始まる。腹が固く張ったり、肩が凝ったり、悪寒を感じたりするのも、すべて邪氣が筋肉や神経を冒したことが原因で、それがひどくなるとリウマチになるというのだ。人が老衰して身体の運動が鈍くなるのも、邪氣が侵入して各部機能を妨げているためだとする（同書29・33頁）。こうした邪氣への対処方については、玉利は自身の経験を交えて、邪氣に冒された部位の筋肉に力を入れることで、邪氣を追い出せるとしている。しかし不随意筋

には意識して力を入れることはできない。しかし冷水浴を行えば両方の筋肉を動かせるというわけである（同書 32-36 頁）。

皮膚の隙間から風（邪気）が入り込むと人は病気になる、とは東洋医学の伝統的な身体観としては常識に属するものであろう。冷水浴で皮膚が引き締まるので病気になると思えるのはその身体観による。玉利はしかしそこに西洋医学の神経の概念を持ち込み、さらに邪気は体外でなく体内に発生するものと考え、その主成分まで想定するようになった。つまり玉利の邪気説の理論面はほとんど近代的な思考に置き換えられている。

3. 明德から靈気へ

すでに指摘したとおり、儒教倫理の教育上の重要性を説く『実用倫理』には靈気という語は使われていない。しかし四書の『大学』の明德と『中庸』の中庸に関する議論は、その後の玉利の靈気説とほぼ重なるものとなっている。そもそも明德について、玉利は、本心・道心・良心・良知・真心・誠・真如・真吾・仁・道・中・天君・如来・神・太一・梵天・太虚などと同じ意味としている（同書 228 頁）。また明德を備える「自我は宇宙の大我と相通ずべき靈即ち本心又は真吾」なのだという（同書 287 頁）。

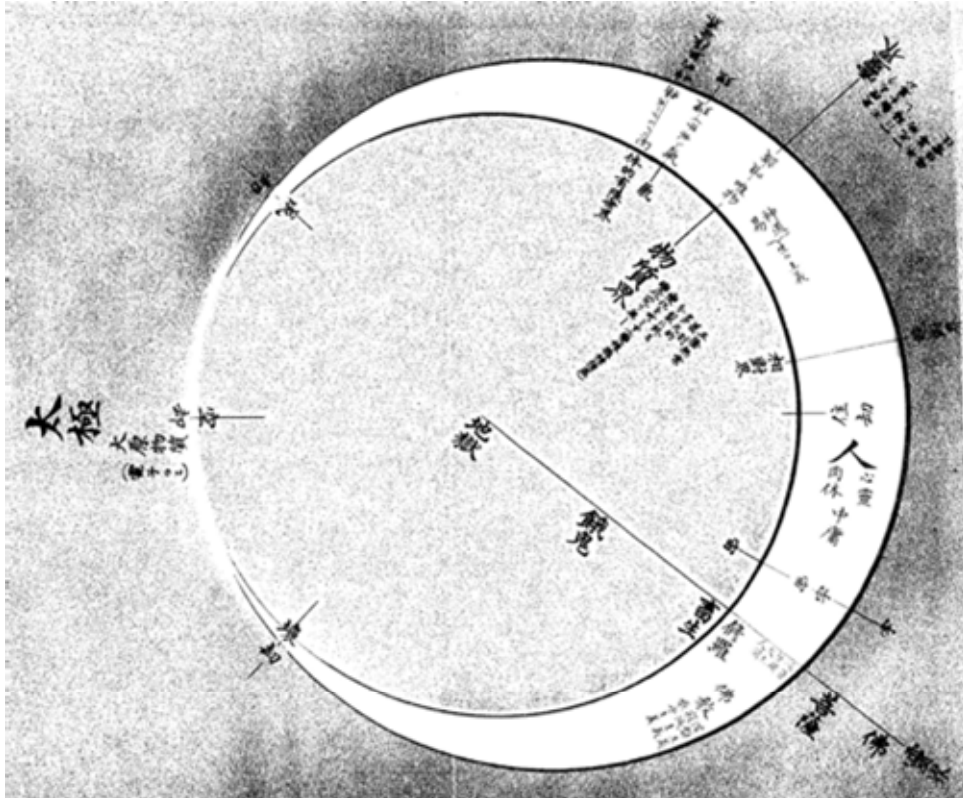
此雑念煩惱心を去りたる平心虚氣の真吾若くは真如の如何に神聖なるやを知るにあらずや。藤樹曰く、明德は本太虚と同体なり。故に天地万物尽く明德の裏面に包在し、聖人明德を明らかにするなり。故に天地と其の徳を合し日月と其の明を合し鬼神と其の吉凶を合すとあり。即ち心を虚にして得たる睡遊者又は天眼通神通力を有するものの実例を照合すべし。聖人の天地とその徳を合することは申すまでもない。……（同書 287 頁）

そして明德と同様に儒教の理想的な境地である中庸を得るための方法である「惟れ精惟れ一」について次のように解釈している。

之れは催眠術に於て能く云う処の精神の統一とか集注とか云うと同一の意味にして、術者被術者共に無意無心所謂無我の境に入り雑念を去りて精神を統一すること精なれば精なる程精神の靈動を現わし易しと云うと同じである。漢学者先生或は之を開いて叱責するならんも精神の靈動する場合は同一にしてその催眠術たり天眼通たり読心術たり降神術たり將た巫たるが如き何も精神の靈動又は神通力を現わす場合には皆同く無我の境に入るべき事は明德解に於て弁じたる通りである。（同書 315 頁）

つまり催眠術にかかった心の状態は、儒教が理想とする聖人の心と同じ状態であり、天地宇宙とつながっているために、特殊能力を発揮することができる。それが正統的な解釈でないことは承知の上で、そのように玉利は考えていたのである。

さらに中庸については、聖人の備える徳であり人間の処世上の要請であるだけでなく、天地宇宙を貫く調和の論理でもあると玉利は考えていた。『中庸』の「中和を致し天地位し、万物育わる」という一句を敷衍して、あるいは「地球と太陽間の遠心力求心力の平均調和」、気候の寒暑や乾燥と湿潤、電気のプラスマイナス、酸性アルカリ性、そして精神（心霊）と物質もまた相互に調和し時に交替すると考えていた（同書 294-299 頁）。こうした宇宙観に仏教思想を組み合わせたのが次図である。



ここで注目したいのは人の反対の位置にある太極に太原物質や電子と書かれている点である。おそらくこれが玉利の靈氣説の原型だろう。

玉利は『内観の人類進化説』において、靈氣が靈魂や精神の他、潜在意識や副意識とも呼ばれるものであることを指摘し、実はそれが人間の意識の本源であり「宇宙實在万有の本体」と称されるものではないかとしている（同書 5 頁）。そして靈氣は、「至靈至妙宇宙万有の本源にして、自ら刺戟物と成り、亦た自ら靈動して遂に万物を創造し、又自ら刺戟を受て益々発達する力を有する」ものとして、靈氣を生物や人類の進化の原動力になっているというのが玉利の主張なのである（同書 118 頁）。

靈氣は宇宙に瀰満し万物の実体と靈力とを、刺戟に依て創造したるものなりといふも、刺戟そのものが靈氣なり、靈氣そのものが刺戟なり。生物は靈力の現に活動するものにして、動物は生物中殊に能く活動するものなり、但し岩石の如き無機物と雖も、その細微分子を顕微鏡下に照せば、皆多少転動す、之れを「ブラウン」氏の運動と云ふ。然らば斯かる運動はその細微分子より成れる一岩石の内部にも行はるゝものと察すべし、蓋し固形物硬化物間に存在するに随ひ、運動遲鈍と成り、之れに反して硬度微弱なるに随ひ、靈氣の他を転動する力は益々活潑機敏となりて、遂に神秘的自在力を現するを見る。

ここで玉利はブラウン運動が靈氣の靈動の現れだという見解を示している。分子のレベルで靈氣は発生している。それが生物ならどうなるのか。玉利は単細胞生物であるアメーバを想定する。

此「アメーバ」自ら移動するに際し、その食物となるべきものに遭遇すれば、偽足を出して静に之れを包囲して、遂に之を体内に取り入れ、その養分を吸収し尽せば、又之れを体外に排棄す。特に神経系の認むべきものなしと雖も、食物の選択をなすより察するに明かに感應すべき神経原質を含有するならん。(同書 86 頁)

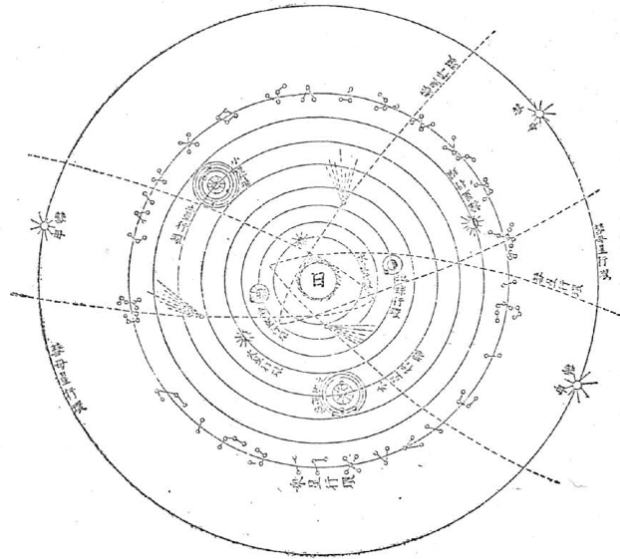
つまり、アメーバには神経系がないのに外界に反応して動くのだから、何か神経のもとになるものが備わっているに違いないと推論したのである。ヘッケルの個体発生は系統発生を繰り返すという有名な説にのっとれば、人間はその成長過程において単細胞生物の時期が存在する。だから大脳や目などの神経系よりももっと原始的な神経の働きをなすものが人間の身体に残っており、それが靈氣なのだというのが玉利の結論なのである。

4. 佐藤信淵の靈氣説

さて、玉利自身はその著作で言及していないため、明確な影響関係は現時点で立証できないが、宇宙と靈氣の組み合わせについては、江戸後期の農学者佐藤信淵の所論が玉利に先行しているといえる。玉利が編者の一人として名を連ねている『佐藤信淵家学大要』は、玉利の靈氣體験よりも前の 1906 (明治 39) 年に刊行されている。同書収録の『鎔造化育論』は、「先づ「人は天地の子」の主張を以つて、時代の農民奴隷の觀念論を打破し、農民が人間として生存確保の権利を要求すべきものであることを明にしようとした」ものと評価されている⁴。実はこの書で展開されている宇宙論において、靈氣の語が見られるのである。

⁴ 羽仁 1929

さて佐藤は『鎔造化育論』で自身の宇宙論を展開するに当たって、平田篤胤『靈能真柱』を参照したことを認めている。その平田は本居宣長の説として伝えられる宇宙論を元に自説を展開してた。下図左が『靈能真柱』所収の図版である⁵。天と地と月がそれぞれ別の天体として示されていることが見て取れる。つまり実は本居の段階で西洋の天文学の知識が密輸入されている。



ところが上図右、『鎔造化育論』所収の図版を見ると、まるで平田のものとは異なる。ほとんど西洋の天文学、それも地動説の宇宙図になっている。これは先行研究で明らかにされているように、吉雄南阜『遠西観象図説』(文政 6 (1823) 年) に依拠して作成されたものだろう。その『遠西観象図説』巻中太虚の条には宇宙空間を次のように描写する。

凡そ、仰いで視る所、蒼茫として限量なき、これを太虚と云う。空濶にして方体なく、清澄にして至虚なるが如しと雖ども、靈妙真氣充実し、屈伸変化休むことなし。氣屈するときは、即ち剛し。これを体と云う。氣伸るときは、即ち柔なり。これを空と云う。体は空裡に入り、空は実体を包括し、剛柔相盪し、空体混融して、万物生々す。……⁶

ここでは西洋の天文学の知識を前提としながら、そこに朱子学の気一元論的な宇宙観が組み込まれている。ただし靈妙真氣といい、靈氣とは言っていない。では『鎔造化育論』において、佐藤はどのように宇宙空間を描写しているか。

⁵ 田原 1973

⁶ 広瀬 1972

謹みて神代の古典を按ずるに、天地未だ成らざる時、天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神有り。斯の三神は、実に造化の首を為す。天造草昧に方りて、一元の靈氣、太虚の中に兆孕（きざ）す。渾渾たり、沌沌たり。廻ち鎔造の神機を頼り、重濁を泌別し、汚穢を分判つ。精粹中央に凝定し、上天以て成就を得るなり。故に上古に天と称するは、即ち日輪なり。……（巻上）

茫茫たる太古、……蓋し大地なる者上説の如ければ、一元靈氣中の重濁なり。故に万物發育の資素を含有するや、極めて多し。……而して地中に混じる所の汚穢、自ずから脱出して一塊物を為す。此れ月輪と為す。大地月輪を分生し、以後漸く凝結し、国土以て固成するなり。（巻中）⁷

ようするに佐藤は、本居一平田の古事記の国生み神話の西洋天文学的解釈を拡張し、コペルニクスの宇宙図で本居一平田の図式を書き換えた。さらに平田の否定していた宋明理学の思想も合わせて導入し、そこで天地万物の元となる靈氣というものを設定した。そして靈氣が万物ことごとくに浸透していることを説き、自身の農業論や経済論の土台としたのである。

まとめ

江戸後期の佐藤信淵と明治から昭和初期の玉利喜造の靈氣説を並べてみると、次のような一連の流れとして読み解くことができる。佐藤は、天地と人とが共に靈氣から生まれたことで一つにつながっているという伝統的な自然観を、西洋天文学の知識によって補強し、社会政策や倫理的な実践の土台にしようとした。玉利は、佐藤とほぼ同じことに取り組みながら、そこに生物学的な知見をも取り込み、靈氣説を人間の身体内部の機構にまで通底させた。だからこそ、当時の治病と修養を兼ね備えた精神療法的実践の理論的な基盤となりえたのではないだろうか。

参考文献

- 玉利喜造先生伝記編纂事業会『玉利喜造先生伝』、玉利喜造先生伝記編纂事業会、1974年
 田原嗣郎等校注『平田篤胤 伴信友 大国隆正』（日本思想大系 50）、岩波書店、1973年
 羽仁五郎『佐藤信淵に関する基礎的研究』、岩波書店、1929年
 広瀬秀雄等校注『洋学 下』（日本思想大系 65）、岩波書店、1972年
 尾藤正英等校注『安藤昌益 佐藤信淵』（日本思想大系 45）、岩波書店、1977年
 吉永進一「解説 民間精神療法の時代」、吉永進一編『日本人の身・心・霊-近代民間精神療法叢書⑧』、クレス出版、2004年A

⁷ 尾藤 1977

吉永進一「解説」、吉永進一編『日本人の身・心・霊-近代民間精神療法叢書Ⅱ⑦』、クレス出版、2004
年 B

The Nature and Body on TAMARI Kizo's Reiki Theory

NOMURA Hideto

The present article examines the establishing process of the Reiki theory, which is an important mental therapy that was prevalent during the Taisho era (1912-1926). Tamari Kizo, an agriculturist, who was active in those days, is also known as a pioneer, who advocated the Reiki theory. Tamari thought that self metabolic function and immune function were accelerated by Reiki (energy) which circulated around the body. He was certain of the presence of Reiki through his own experience. However, the concept of Reiki did not derive from his creation. There were two origins --- traditional origin and modern origin.

One of the origins of Reiki theory was the thought of Sato Nobuhiro, an agriculturist of the late Edo period. Tamari mentioned Reiki in "Hereditary Learning of Sato Nobuhiro, Outlined", of which he was one of the editors. Sato smuggled cosmology of Western astronomy into Atsutane Hirata's cosmology, reinforcing his own theory with Chinese thought. And he taught people that Reiki permeated into all beings whatsoever, and made this theory foundation of agriculture and economic theory.

Tamari, based on development of such preceding Reiki theory of the Edo period, and, further, taking in biological knowledge learned from the Western world, made the Reiki theory underlie the structure inside human body. Thus he is considered to have made it logical foundation for mental-therapeutic practice of those days, which combined healing and spiritual training.

Keywords : Tamari Kizo, Sato Nobuhiro, Reiki